中国雲南省ラフ族における社会変容と民族意識に関する研究

――

平成 19 年度入学
参加したフィールドスクール：ネパールフィールドスクール
調査地（調査国）：タイ、中華人民共和国
堀江　未央

キーワード：少数民族、観光開発、文化、民族意識

自分の研究テーマについて

本研究の目的は、中国雲南省、ミャンマー、タイなど複数の国家に国境を跨いで居住するラフの人びとを研究対象とし、彼らが異なる国家に属しながらどのように共通の意識を持ち、またどのような相違が見出せるのか、彼らの過去に対する認識や語りの違いに着目しながら研究することである。特に研究上の空白の多い雲南省のラフ族を主な対象とし、中華人民共和国の民族政策や近年の民族観光産業の進展、中国内陸部地域の開発のなかで、彼らがどのような自他意識を紡いでいるのかを問う。そして、それが国境を隔てたタイやミャンマーのラフとどのような差異とつながりを持っているのか、考えたい。

文化大革命の終了後、封建的な文化の破壊や極端な民族政策への反省から民族優遇政策が採られるようになり、市場の開放と自由化のなかで民族文化はエキゾチックで魅力的なものとして可視化されていく。ラフ族はこれまであまり目立った「民族文化」を持っていなかったが、1992 年より新たな民族祭典として「葫蘆節」が設立される。これは、「ラフは瓢箪から生まれた」という伝承に依拠したものである。民族観光の進展のなか、民族文化を提示「しなくてはならない」という意識が強まっているように感じられる。

本フィールドスクールでは、観光開発の著しい雲南省の状況とネパールにおける開発の様相を比較考察することと、国境地帯における人々の生活のあり方を探ることを目的とした。

フィールドスクールから得られた知見について

本フィールドスクールにおいては、南部タライ地域の先住民族であるタルー族によるストライキやムスリムによるゼネスト（いずれも未遂）、マオイスト系の学生選挙などに直面し、まさに変革期の社会の様相を垣間見ることができた。民族意識や社会問題への関心が先鋭化し、権利の主張がさかんに飛び交っているように感じられた。Martin Chaudari という、開発や社会問

学生選挙のために行進するマオイスト系の学生

題に関する研究機関で話を伺った際も、海外のドナーへの成果ばかりを重視して現地の方を向いていない国内 NGO の問題点が挙げられるなど、国外援助に多くを頼るネパールが抱える問題について活発な議論が交わされていた。しかし、これらの議論が現地で活動する NGO にどれほど共有されているのか疑問に思う部分もあり、海外ドナー・研究機関・現地活動 NGO・住民という各ファクターがいかにコミュニケーションを図るかが重要だと感じた。

また、チトワン国立公園における周辺住民の排除と衝突について話を伺った際、公園内でのほぼすべての生産活動が禁じられ、公園内に入った女性が軍によって強姦される事件が相次ぐという話を伺った。NGO が住み込みで活動を行ってはいたが、やはり深刻な問題である。

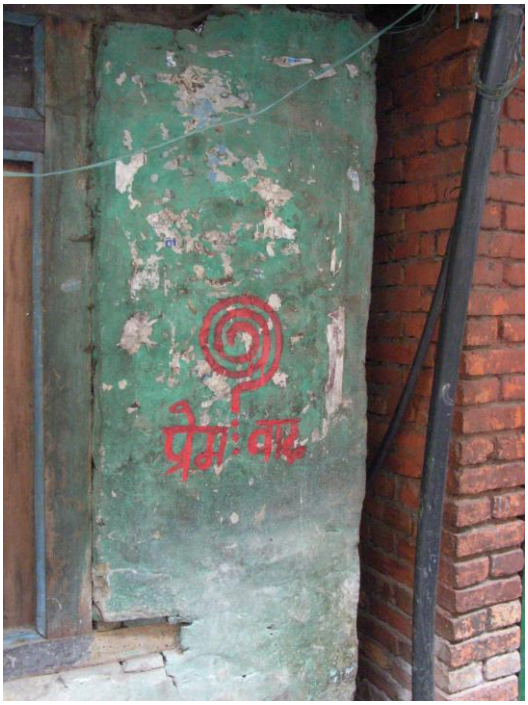
本フィールドスクールでは、まず座学を行ってから現地に入ったので、国家レベルで起こっている問題が現地でどのように立ち現れてくるのか考えさせられるところが多く、非常に有意義であった。その一方で、やはり開発に携わる方からのお話が多く、開発の負の側面について現地の声を聞く機会が少なかったのは残念であった。

チトワン国立公園の川で洗濯をする子どもたち

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

ネパールで学んだ国立公園と現地住民の問題を、広く観光開発に付随する問題と捉えれば、雲南省における観光開発を違う視点から捉えるのに有意義である。ネパールの場合は国家と現地住民という構図が比較的明確であるのに対して、雲南では開発をリードしようとする現地有力者の存在が大きく、事態は複雑である。現地住民が一枚岩ではないという（当然の）現実を前に、開発の利益をどのようなかたちで享受するのがいいのか、考えていかなくてはならない。

また、チベット国境付近においてしばしば目にしたのが、「Lovism」とかかれた不思議なマークである。現地では「社会不安になるとこのようなスピリチュアルな運動が起こる」という説明を受けたが、これが内戦の激しかったこの地域に顕著な動きだとすれば、周縁における宗教の動態を考える上で興味深い。雲南西南部においても社会不安に付随してカリスマを頂点とする宗教運動が起こっており、それは国境を越えて広がっている。この事例を契機として、周縁地域の宗教活動などを通じたネットワークについて考察を深めていきたい。



「Lovism」という意味の言葉が書かれたマーク